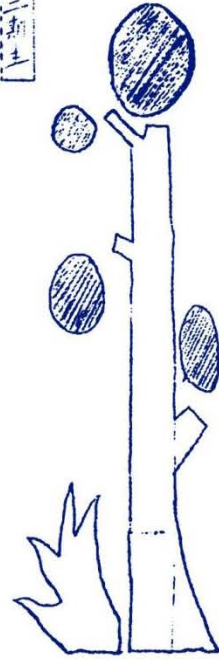


十五年

五年一日

浅野 社郎



「小生は、高校生活三年にして四つの誤りを犯した。一つは、読書の習慣をつけられなかった事であり、一つは、記念祭で一度も劇に出演しなかった事であり、又一つは、二度恋をし、更に破れ、今一つは、のろわしいハンドをした事である。此の中二つは既に過去の出来事であり、二つは未来へと続く道の入口のようである。道は、多分此の手先の状態で、来る大学生活を支配することになるが、これには、大学入試の発表を待つ卒業的二週間後の日記の書き出しである。所属が巧く、毎ぶらりんの不特定な期間にしては、まずは冷静な観察である。

高校入学当初ボクは運動よりも文化活動に参加しようと思っていた。そんなボクがハンドボール部員として部室に入るのを許され、希望に胸をふくらませたのもつ

かのま、勉学・余暇・運動との板ばさみにあつて、打ちまち考えこんでしまった。夏の名も高かった三田高校が遠征して来て、傍中にやっていた内にか勝つてしまひ、今まごにない不思議な気持をおぼわつた。又、ボクの其の後の方向を決定した一つの要素は、二学期に行われた体力測定だった。当時バスケットとは對抗意識が強かつた。せいか、ハンドの者が走つたり投げたりする時には、二三年生が休み時間に伴走してくれたり声をかけてくれた。そのせいもある。五メートル走り、パービートラストを深いて一級になれた。西さんや中江さんは五十メートル走り、六秒五とか四とかきいてびっくりしたり、総合的にはバスケットには勝っているとかいつたり、いやいやハンドボールが天下を取ったかのような騒ぎだった。

このようにして次第にハンドボール部になじむと共に技術も向上し、一年の終りから二年の初めまでには、三田、北野、豊中、池田と五本の指に数えられるようになった。こうなると、考えこんでなごらぬ。新しいのが人情で、二年の冬三田から、ほめて新人大会杯をとるまで、毎日ハンドボールの明け暮らつた。中江さんが一年の疲

辺(ピテカン)とマンツーマンで衝突し顔
 面にかみつかれ、大きな汗ばんそうこうを顔一
 面に汗かかっている写真が残っているが、その
 瞬、練習は、なにか殺気が感じられるよう
 な気がする。その後、芥民大会で優勝し、
 近畿大会で和歌山へ行っただが三位で兵庫工
 程塚と三國に王位をゆずってしまっただ、
 あ前等の内であと五人、あほかみっくらイ
 ンターハイも望みがあるのに、とよく中江
 さんが言われたが、ひま、としららと思う
 んは、ひいぎめだろうか。

西原は、三年の冬の室内にも出場し、
 あとの者は早くば五月に、遅くとも九月
 にはやめていたと思ふ。なにかせ大学へまで
 行ってハンドをやっているあほかみっくら
 なのだから、もって推測すべしである。も
 とはと言え、ハンドがボクをあほかみっくら
 のである。ボクにしても中学生時分は文化
 性の高い少年だったのに、
 うらみであまりある、と、いいたい
 所だが、実際云って、現在ボクはあまり後
 悔はしていない。高校の部に入る時には別
 に一大決心したわけではないが、去年今年
 と東西対抗にも出してもらい、最早来るこ
 ころまで来たという感じで一杯である。い
 きがかりエ、大学生活あと二年昨日のこと

くハンドを競けていくことだろうが、今と
 なっては泣いても笑ってもボクからハンド
 をとつたら何も残らないうだから、ボクの
 文化的素質には目をつぶって、一度王座で
 もねらつてやろうかと大志をいだく事は、
 あなばち罪でもあるまい。

